ワーズワス（作）『マイケル－田園詩』（1800）

—マイケル老人の悲劇—

黒　岩　忠　義

（1994年10月17日　受理）

Wordsworth: "Michael, a Pastoral Poem"

—— Old Michael's Tragedy ——

Tadayoshi KUROIWA

は　じ　め　に

『マイケル－田園詩』（*Michael,* a Pastoral Poem）* は *Lyrical Ballads*（1800）第2巻の最後に37番目の詩として掲載されている。もし Coleridge の *Christabel* が予定通り書き進められて完成していたならば，*Michael* がこのような形で *Lyrical Ballads*（1800）に載ることはなかったであろう。1800年十月第一週までには Wordsworth は *Lyrical Ballads* 第二巻の草稿を第一巻に印刷する筈の「序文」と一緒に印刷屋に既に送付していた。(1) そして Coleridge が残りを完成するのを待ちながら，Wordsworth は第二巻に載せるはずの詩の評論に着手しはじめた。十月四日夕，Coleridge が突然，Keswick の自宅を出て徒歩で Grasmere に来て *Christabel, Part* 11の始めの部分を朗読している。Wordsworth は翌朝，再度，同詩の朗読をはやる気持ちを抑えて聴くや，その *Christabel* の批評の一節を序文の終わりの部分に挿入すべく書き，その夜，Dorothy が印刷屋宛てに投函している。しかし，二日後の十月六日には Wordsworth と Coleridge の両者は急遽 *Christabel* を *Lyrical Ballads* から排除することを決めている。(2) その理由は両者の文体の違いにあったことが Longman 宛ての手紙(3)から推測されるが，もう一つの理由は Coleridge の詩的想像力が創作の重荷に消失していたことにある。

このようにして，Wordsworth は既に印刷中の *Lyrical Ballads* を補う必要に迫られて，かなり大部からなる詩を作る必要があった。そのためには，頭の中で既に醸成されつつあった筈の長い（因みに，*Michael* は491行からなる），しかも重要な詩に着手したのであった。Dorothy の日記によれば，題目はまだ決まっていなかったけれども，それは明らかに，「不均等に分けられて殆んど heart 状に作られた」（'built nearly in the form of a heart unequally divided'）「羊囲い」(4) と関連して，やがて *Michael,* a Pastoral Poem の詩へと発展してゆくのである。Wordsworth 兄妹は

十月十一日 Green-head 渓谷の探索に出かけ，そのとき，くだんの羊囲い（the Sheep-fold）の跡を発見したのである。そして翌十二日に書き始められ，次の二ケ月間は断続的にその羊囲いの詩に執心し，十二月九日にはその詩は書き終えられている。[5] そしてその年のクリスマスまでにはその491行の詩は一部は Coleridge の手伝いもあって，清書をすませ Bristol に送付されたのである。[6] そして五週間後には，*Lyrical Ballads* 第二版の *Christabel* が納まるべき位置，つまり最後のページに *Michael*, a Pastoral Poem の題目で出版されることになる。

Michael の物語はその重要な主題と関連ある二つの初期の資料に基づいている。その一つは Cumberland の山々を居とする老羊飼いの英雄的人物を描写しながらも，自らの人生を語る無韻詩であるが，Stephen Parrish の検証によれば，*Recluse* のために手がけられて Coleridge の1796年詩と Dorothy の日記の空欄に殴り書きにされて残っている。この殴り書きのなかに，Michael とその息子の生涯における一つの出来事が出てくる。つまり，その話は行方不明の一頭の羊を捜す話しとして *Prelude*Ⅷ（1805），222-311で Mrs. Matron's Tale として語られている。もう一つの Michael と Luke の話は150年以上もの間 Dove Cottage Notebooks の一つに未発見のまま眠っていた資料のなかに，半ばおどけて書かれた Michael の不運についての六連からなるバラッドである。Parrish はこれらの Dove Cottage の原資料に基づき，Wordsworth がこれらの資料から老人 Michael の悲劇的絶望の中心的出来事と一緒にその羊囲いの中心となるイメージを描いて行ったと推測している。[7] 要するに，*Michael* はその地方に実際に起こった二つの伝承が合体してつくられたのであった。つまり，都会に出て悪の道に走った Michael の息子 Luke の人物像と状況は Wordsworth 兄妹が住んでいた家の何年も前の住人である家族に由来し，また Michael という人物は七年間も寂しい谷間で羊囲いを作って来た一老人の話に由来したものである。

1

この詩の冒頭は先ず読者を，「公道」（'the public way'）(1)からそれて「秘境」（'a hidden valley'）(8)の Green-head 渓谷へと至り，せきたてるように騒々しい音をたてて流れる小川沿いに登るようにと誘う描写から始まる。そして切り立った道との「苦闘」を促す。詩人の激励に促されてその峻険な坂道を登ると，そこは田園的な山々がたぎりたつ小川の辺りに，おのずから開けて独自の「秘境」をつくっている。人家はなく，ただ見ることができるのは「二，三頭の羊と岩と石と，それに頭上高く舞う鳶」だけである。なんとも，寂寥そのものである。

If from the public way you turn your steps
Up the tumultuous brook of Green-head Gill,
You will suppose that with an upright path
Your feet must struggle; in such bold ascent

The pastoral Mountains front you, face to face.
But, courage! for beside that boisterous Brook
The mountains have all open'd out themselves,
And made a hidden valley of their own.
No habitation there is seen; but such
As journey thither find themselves alone
With a few sheep, with rocks and stones, and kites
That overhead are sailing in the sky.　　(1-12)

この詩の冒頭部分は勿論，単なる情景描写ではない。いづれ引き倒し，死の寸前にまで追い込む或る「力」に対する人間の無限の「苦闘」が暗示され，当然本詩の主題と深い関わりがある。ここに描かれた「秘境」が本詩の主人公 Michael 老人とその家族一家の居住する世界であり，「二，三頭の羊と岩と石」の描写は，Michael 一家の過酷な生活条件を指すものと思われる。さらに頭上高く舞う鳶の描写はその渓谷に住まう Michael 一家の上に漂う不吉な死の影である。詩人の言葉によれば，'It is in truth an utter solitude' (13) と言うことになろう。因みに，この頭上高く舞う鳶のイメージは，状況は異なるが，手法の点で奇しくも Graham Greene の *The Power and the Glory*[8] の冒頭部のシーンを想起させる。

さて，詩人がそのような「秘境」('a hidden valley') に案内したのは他ならぬ確固たる一つの理由があった。それは，「たとえ見ても気づかないで，通り過ぎるかも知れない一つのもの」('one object which you might pass by, /Might see and notice not') (15-16) に言及するためである。

Beside the brook
There is *a straggling heap of unhewn stones*!
And to that place a story appertains,
Which, though it be *ungarnished* with events,
Is not unfit, I deem, for the fire-side,
Or for the summer shade. (Italics mine) (16-21)

小川の傍の「とり散らかされた荒削りの石の塚」に，詩人が語らねばならぬ一つの物語があると言うのである。その物語とは「事件で彩られた話しではないけれども」('ungarnished with events') (19)，「炉辺で，はたまた，夏の緑陰で語るにふさわしい話」(20-21) であると断るところに Wordsworth の詩人としての性格を見る。つまり，Wordsworth は元来珍奇なるものを避けて，平凡さの中に非凡なるものを発見し，不変の真実をうたう詩人であったからである。Wordsworth が少年時代に好んで聴いた話は，仕事と住居とを谷間にもつ住民，羊飼いの話であったけれども，

それは単に彼らが好きだったからではない。彼らは仕事と居を営む山々や丘と深く関わりがあったからである。書物には無頓着な少年の頃，すでに「自然のもつ威力」（'the power of Nature'）（28-9）を感じることができるようになっていた Wordsworth は「自然の物象の優しい働き」（'the gentle agency/Of natural objects'（29-30）に助けられて，その話の中にまだ自分のものではない感情を感じ，不完全ではあったが，「人間や，人の情，人生」（'on man; the heart of man and human life'）(33)について考えることができるようになっていた。そしてその話を詩人は「自分が亡くなった後もそこの山々に住んでいて『自分の後継者』（'my second self'）になるかも知れない若い詩人たちの歓びのために語ろう」（35-9）と言うとき，また Michael 老人をして「両親達は先祖の墓地に眠ることを厭はなかった。おまえも先祖の人々がしたように生きて欲しいのだ（379-381）」と言わしめるとき，この詩における Wordsworth の主要な関心事の一つは継承性（Continuity）にあることがわかる。

2

Michael, a Pastoral Poem は批評家の間では高く評価されてきた人道的な詩の中で最も成功した詩の一つである。Wordsworth はその主旨を Thomas Pool 宛の手紙（April 9, 1801）の中で次のように書いている。

In the last Poem of my 2nd Volu. I have attempted to give a picture of a man, of strong mind and lively sensibility, agitated by two most powerful affections of the human heart; the parental affection, and the love of property, *landed* property including the feelings of inheritance, home, and personal and family independence.' (9)

「最後の詩」とは本詩 *Michael* のことであるが，この詩の中で詩人は人間愛の中でも二つの最も強力な愛情つまり遺産，家庭，個人と家族の自立に対する感情を含む両親の子どもに対する愛と，土地，財産に対する愛によって揺さぶられる強い精神力と活発な感情の持ち主を描こうとしたことがわかる。しかるに，主人公 Michael は Grasmere の森林地帯に住む年老いた牧人ではあったが，強い精神力，手足は強く，体格は若い頃から老齢の今に至るまで人並以上に強健，心は鋭敏で，熱烈，質素で何事にも向き，牧羊の職業に賭けては人並以上に敏捷で用心深い人間として描かれている。

Upon the Forest-side in Grasmere Vale
There dwelt a Shepherd, Michael was his name,
An *old* man, *stout* of heart, and *strong* of limb.

His bodily frame had been from youth to age
Of *an unusual strength*; his mind was *keen*
Intense and *frugal*, *apt* for all affairs,
And in his Shepherd's calling he was *prompt*
And *watchful* more than ordinary men. (Italics mine) (40-47)

Michael は齢は八十歳に達していたが，彼には二十も違う見目麗しい，「働き者」('a woman of a stirring life') ⑻である妻 Izabel とそれに，可愛い一人息子 Luke と，どんな嵐にも鍛えられた二匹の勇敢な犬がいた。働き者の妻は二台の糸車をもち，一台が休んでいるときは，もう一台が動いていたと言うのであるから，勤勉な Michael 老人に相応しい妻であったことがわかる。一人息子の Luke は，牧人 Michael にとって立派な跡継ぎを意味するが，牧人達の言葉で言えば「棺桶に片足をつっこんだ年齢」('with one foot in the grave') ⑿になってから生まれたので「掛け替えのない宝物」('the one of an inestimable worth') ⒁として育てられたのは言うまでもない。日も暮れて戸外の仕事から帰宅するや，一家はこざっぱりした食卓に向かい粗末な夕食を囲む時をのぞけば，夜なべの仕事の手を休めることはなく，夕食がすむとはやばやと，また Michael は息子の Luke と暖炉の傍らに座り，炉辺で都合の良い仕事に精を出すのである。黄昏が迫ると，きまって Lamp が吊り下げられる。ここからはその谷間一帯を広く見渡せたので，この家自体がいつの間にか人々の間では，「つつましい夫婦が生きた生涯の公の象徴」('a public Symbol of the life, /The thrifty Pair had lived') (137-8) と考えられ，またその証しとして，広く「宵の明星」'The Evening Star' と呼ばれるようになる。

また Michael は長年連れ添った妻を愛しただけではない。年老いて生まれた息子にたいする愛情は格別のものであった。要するに，息子と言うものは，もしもの時は生の継承への希望であるが，殊に一人息子 Luke は何にもまして，老い行く Michael に与えられた「希望と将来への期待」('hope and forward looking thoughts') (155) でもあり，また，「自然の成り行きとしてどうしても失敗しなければならないときには，不安のための心の動揺」('stirrings of inquietude, when they/By tendency of nature needs must fail') (156-7) のために，実はこの不安は現実のものとなるのであるが，「尚一層愛しい」(more dear) (150) のである。従って，Michael 老人が「暇つぶしや，楽しみのためだけでなく，忍耐強く，優しい行為に駆り立てられ，しばしば女のするような優しい手つきでゆりかごを動かしたり」(162-8) したのは，この細やかな「愛情の行為」('acts of tenderness') (167) において，彼は自分の生を継承してくれるもうひとつの生を息子 Luke に見ているのである。

Michael 老人は厳しい頑固な心の持ち主でありながらも，外で仕事をするとき，また玄関先の大きな樫の老木，通称「刈り込みの木」'The CLIPPING TREE' (179) の下で仕事をするときは，まだ男の身なりもせぬ Luke を目の届くところに置きたがる。そしてそこに横たわる羊に悪さで

もしようものならば「愛情のこもった眼差しでたしなめたり，叱ったりして，心遣いをしたものである」(182-3) と言うとき，年老いた Michael の Luke によせる愛情の程が読みとれる。

There, while they two were sitting in the shade,
With others round them, earnest all and blithe,
Would Michael exercise his heart with looks
Of fond correction and reproof bestowed
Upon the Child, if he disturbed the sheep
By catching at their legs, or with his shouts
Scared them, while they lay still beneath the shears. (Italics mine) (180-6)

また玄関の前にたつその一本の「樫の老木」は Michael が長い「時」の力と衰退に耐えてきた「忍耐」の象徴であると同時に，また彼の「苦闘」をも意味する。その老木の下で老人は Luke に羊の刈り込みの術を伝授するのである。

五歳になったばかりの Luke に分不相応にも Michael 老人が手づくりの見事な牧羊者の杖 (a perfect shepherd's Staff) (193) を授けるのは，殆んど儀式的な行為に近い。しかし，そうすることによって，老人は生業としての牧人の仕事を息子の Luke に引き渡したのである。十歳になった Luke は今ではもう十分，山の嵐も，高いところに登るのも，長い道のりもものともせず，父親と一緒に毎日，行を共にする「友達のように」('as companions') (208) なるのである。したがって，Michael は「太陽と光」('Light to the sun')，「風と音楽」('music to the wind') (212) の関係に見られるが如き「感情と流出物」('feelings and emanations') (211) との対応を息子の Luke に感じとり，「老人 Michael の心は生まれ変わった」('the Old Man's heart seemed born again') (213) のである。この様にして，少年 Luke は十八歳になり，父親の「慰めとなり日々の希望」('his comfort and his daily hope') (216) となって行く。

Wordsworth はこのような堅実でほほえましい家族愛と勤勉を描く背景を Charles James Fox (1749-1806) 宛の手紙 (Jan. 14, 1801) の中で明らかにしている。——それによると当時の賃金と生活費との増大する不均衡に加えて，国全体にわたって産業の拡大と重課税が進み，貧民救済施設や工場などが拡大し，貧しい人たちの間における家庭愛の絆は弱まり，また数えきれないほどにまったく破壊されていった。また，両親は子供達から，子供達は両親から隔離され，妻達はもはや自分の手で夫のために食事を用意することもない。夫が家庭に興味を抱くものはなにもなく，また愛するものはそこにはなにも残されていない，と書いている。その一例として詩人は二人の隣人の夫婦を挙げている。それによるとその夫婦は八十の齢を越えた孤独な老人で，夫は何カ月も寝床に臥したまま，その二，三週間は彼の妻以外には世話をしてくれる者とていない。妻も最近，足の不自由のため夫の寝床まで食事を運ぶことができないこともあった。近所の人たちが井戸から水を汲み，

その他のことをして挙げる。しかし彼女の病はひどくなり，早晩二人は他の貧しい人たちと一緒に教会の救済を受ける必要に迫られても，長い間二人で住む家を持っていればそのような手だてを受けるのも難しいのでは，と心配するようになる。そのことを考えると彼女は「胸が張り裂ける想い」であると書いている。[10] この事実は詩人にとっては，当時自立の精神がまだ英国の幾らかの地域では根強く残っていて，このような人達にはまだ自立的家庭生活の幸せへの崇高な自覚が認められることを意味した。もしこのような精神が急速に消失しつつあるのが真実であるとすれば，国にとってこれ以上の不幸はないと言う社会認識のもとでこの詩が書かれたのであった。

3

然るに，勤勉で誠実な Michael 一家は突然，「悲しい報らせ」（'distressful tidings'）（219）に襲われる。もともと，裕福でかつ勤勉であった甥が思いがけなく不幸に襲われ，彼の保証人となっていた Michael 老人はその債務の弁済を命じられたのである。その額は彼の資産の半分に近い。そこで Michael 老人は「どんな老人も思いもつかないほどの希望」（More hope out of his life than he supposed that any old man ever could have lost）（229-30）を奪われたのである。しかし，老人は勇気を取り戻しその難事に対処すべく，父祖伝来の財産の一部を売ることにする。しかし，考え直してみるや，その勇気は二日後には挫ける。「もしこの土地が他人の手に渡ることにでもなれば，墓の中に無事眠ることはできないと思うのだ。」（240-2）

"Isabel," said he,
Two evenings after he had heard the news
"I have been toiling more than seventy years,
And in the open sun-shine of God's love
Have we all liv'd, yet *if these fields of ours*
Should pass into a Stranger's hand, I think
That I could not lie quiet in my grave." (Italics mine) (284-92)

と，彼の心は揺れる。この苦悩の言葉には父祖との強い絆と父祖伝来の遺産への愛着がある。1800年当時 Grasmere 周辺には約200人近くの人々が住み，その中の26人は 'statesman' と呼ばれ，自由な土地を分けないで遺産として保有する小農民達であった。Wordsworth はこの地を牧人達と農民達の完全な共和国とみる傾向があった。しかし，産業都市の成長に伴い織物の家庭産業の衰退は，より貧乏な 'statesman' たちをして土地を金持ちに売らせ，その結果不平等は拡大していった。Wordsworth はそれまでは私有財産を否定する William Godwin（1756-1836）の思想を受け入れていたが，やがて私有財産を手放すことによる沈滞の原因を理解するに至る。そこで

Wordsworth は貧民の財産は全ての財産の中で，「最も聖なるもの」と言う C. J. Fox の信念を確信するようになり，家族愛の恒久的集合点としての土地の重要性を力説する手紙を当時の有名な政治家 Fox 宛に送ったのであった。[11] したがって，Michael は土地を手放さないで抵当を抜くには，一人息子の Luke を都会に出稼ぎに出すしかない。その提案を受けた妻の Izabel も，かつて貧乏で教会の世話になっていた Richard Baitman（実際は Robert Baitman のこと）が London に出て行って大金持ちになり，故郷に大理石の立派な教会を寄付したことを想いだし同意する。二人は喜びに顔を輝かせ，Michael は言う。

"Well! Isabel, this scheme
These two days had been meat and drink to me.
Far more than we have lost is left us yet.
—We have enough— I wish indeed that I
Were younger, but this hope is a good hope.
—Make ready Luke's best garments, of the best
Buy for him more, and let us send him forth
Tomorrow, or the next day, or to-night:
—If he could go, the Boy should go to-night." (Italics mine) (284-92)

Michael はその計画に，「失ったものを償うに余る希望」('far more than we have lost') (286) を託し，その二日間大いに歓び，明日と言わず，すぐその日にも出発させることにする。「Luke の晴れ着をつくってやれ。もっと買ってやるがよい」。この場面は，状況は反対であるが新訳聖書，奇しくも，その名も Luke 十五節の放蕩息子の場面を暗示する。そこでは放蕩息子が自分の分け前の財産を都会で全部使い果たし，犯した罪を深く悔い，乞食同然の姿で父親のもとに帰ってくる。父親は息子を優しく迎え，召使いらに向い，次のように云う。

And he arose, and came to his father. But when he was yet a great way off, his father saw him, and had compassion, and ran, and fell on his neck, and kissed him. And the son said unto him, Father, I have sinned against heaven, and in thy sight, and am no more worthy to be called thy son. But the father said to his servants, *Bring forth the best robe, and put it on him; and put a ring on his hand, and shoes on his feet:And bring hither the fatted calf, and kill it; and let us eat, and be merry:* (Luke 15:20-23) (Italics Mine)
（父は僕らに向かい，早く最上の服を取り来たりてこれを着せ，その手に指輪をはめ，足に靴を履かせよ，また肥たる牛を牽き来たりてほふれ。我ら会食して楽しまん。）（イタリックのみ）

しかし，その後も Michael の苦悩は続く。妻の Izabel は夫 Michael の苦悩を寝言のなかに聞きつけ，Izabel も内心喜ぶ。

"Thou must not go
We have no other Child but thee to lose,
None to remember－do not go away,
For if thou leave thy Father he will die." (305-8)

このように，Izabel は自分の気がかりを息子の Luke に話した後は，心も落ちつき，一家が食卓につく様は，「クリスマスの炉辺を囲む幸せの人々のよう」（"like happy people around a Christmas fire."）（313）と形容され，また，Luke が出発するまでの Michael 一家は，「春の森のように浮き浮きしていた」（"as cheerful as a grove in Spring"）（316）とある。

Michael は息子の旅立ちに先立ち，深い谷間の小川のそばに計画中の羊小屋のため集められた「石の塚」，"the heap of stones" へと Luke を案内し自らの手で「隅石」（'corner-stone'）（414）を一つおくように命ずる。勿論，この「石塚」は Michael が継続中の「仕事」を意味し，そこを流れる「騒がしい川」（'the tumultous brook'）（332）は Michael にとって抗しがたい「時」の「力」を意味する。その石塚を前にして，Michael 老人は Luke が胎内に宿されたときからその時に至るまでの二人だけの父子物語を手短に語る。そして，もともと父子二人の仕事として始められた羊囲いの仕事も，今後は，いずれ「二人の為」に自分に課された仕事として継続さるべきこと，今や父子二人をしかと結ぶものは「愛の絆」（'the links of love'）（412）だけであり，また Luke がその継続中の仕事に自らの手で「隅石」を投ずることは，悪者が仲間になることがあっても，その「羊囲い」が彼の「拠り所にしてかつ盾」（'thy anchor and thy shield'）（418）となり，またあらゆる恐怖と誘惑のなかにあって「先祖が送った生活の象徴」（420）となり，また「父子二人の間の契約」（'a covenant/' Twill be between us'）（424-5）であること等が一方的に語られる。そこで深い永続的な父子の絆と継続的仕事への証しとして，Luke は父 Michael の求めに応じて，おもむろに自分の手で一つの石を取り上げて置く。次はその感動的な場面である。

The Shepherd ended here; *and Luke stooped down,*
And as his Father had requested, laid
The first stone of the Sheep-fold; at the sight
The Old Man's grief broke from him, to his heart
He press'd his Son, he kissed him and and wept;
And to the House together they return'd. (Italics mine) (428-433)

この行為は極めて象徴的であり，父がそれまでに取り組んできた仕事への Luke の加担を意味する。Luke は奇しくも，旧約聖書の記述に則るかのごとく父の命令に忠実である。同じく，旧約聖書の Joshua 記は人と人，また神とイスラエル人との契約の証しを次のように記している。

So Joshua made a covenant with the people that day, and set them a statute and an ordinance in Shechem. And Joshua wrote these words in the book of the law of God, and took a great stone, and set it up there under an oak, that *was* by the sanctuary of the Lord. And Joshua said unto all the people, Behold, this stone shall be a witness unto us; for it hath heard all the words of the Lord which he spake unto us: it shall be therefore a witness unto you, lest ye deny your God. (Joshua 24: 25-7. 下線部筆者)

4

このように父子の間に厳粛な約束が取り交わされるや，Luke は羊飼いの宿命を課せられ，多くの村人の見送りの中を「秘境」Green-head から「公道」('the public way') に出て London へと向かう。父子の間にとり交わされたその約束は，*Immortality Ode* の Epigraph におかれた「虹の歌」"The Rainbow" の一節を想起させる。まさに，大空に懸かる『虹』は Wordsworth においては神と Noah の間に交わされた神と人との厳粛な契約であり，かつ幼児と大人とを結ぶ想像の架け橋をも意味する「自然への崇敬」('natural piety') の象徴であった。[12] しかし人間同士の間の契約は経験の世界には無力である。Luke を都会に送りだした後，始めの頃は全てが順調に行き，Michael 老人はそれまでと同じように羊囲いの仕事を再開する。だが Luke はやがて勤めに緩みが出て，ついにふしだらな都会で悪の道に身をゆだね，不名誉と恥のためついにそこを追われ，隠れ家を外国に求め，行方は知らされない。しかもこのことはわずか五行で語られ，それ以外のことは何も語られていない。しかし，Wordsworth の *Prelude* Ⅶ (1805), 'Residence in London' から考察すれば，Luke が悪の道に陥った経緯は理解できよう。Wordsworth においては，都会では人間は相互にまったく無関係で，しかも「自然に対する崇敬の念」('natural piety') は絶たれている。この「ロンドン滞在」のなかで「悪夢」('nightmare') として描かれるものは悲劇そのものである。そのような悪としての都市文化の中で Luke が悪の道に走ったのは当然のことであった。従って Wordsworth はそれ以上に Luke には関心はなく，むしろその後 Michael がどのように前向きに生きたかに関心がある。勿論，Michael 老人が生の継承者としての一人息子 Luke の疾走に苦悩しなかったわけではない。その苦悩の程は短いながらも，次の一節に読みとることができよう。

There is a comfort in the strength of love;

'Twill make a thing endurable, which else
Would break the heart. (Italics mine) (457-9)

即ち，「もしそれがなければ，気を狂わせ，断腸の思いをさせる事柄」とは，息子を失った老人の苦悩は筆舌に尽くしがたいものであったことを意味するのである。しかし，Michael は何事もなかったかのように，「愛の力に慰め」(457) を得て毎日毎日，Luke との間に交わされた約束としての「契約」'covenant' (424) を果たすべく谷間へと出かけて行く。その「愛」とは何事にも耐える精神の力のことであろうが，それは人間が自然との交流をとおして，つまり「自然愛」によって人間の心に愛が芽生えその力によって人生苦に克ちうることを示したものである。詩人は既に冒頭部で「私が谷間の住人，羊飼いを愛したのはたんに彼らが好きであったからではなく，彼らが仕事と居を営む山々や丘に愛着を感じるからだ。」(23-6) と語ったとき，自然の力が人間の精神形成に果たす役割は計り知れないものであったことを意味しているのである。Wordsworth は当時の Michael 老人のことをよく記憶している人々に次のように語らしめている。

His bodily frame had been from youth to age
Of an unusual strength, among the rocks
He went, and still look'd up upon the sun,
And listen'd to the wind; and as before
Perform'd all kinds of labour for his Sheep,
And for the land his small inheritance.
And to that hollow Dell from time to time
Did he repair, to build the Fold of which
His flock had need. 'Tis not forgotten yet
The pity which was then in every heart
For the Old Man—and 'tis believe'd by all
That many and many a day he thither went,
And never lifted up a single stone. (Italics mine) (463-75)

体格は若いときから老年に至るまで，並外れて頑健で，彼は岩間をかけゆき，いつも風に耳を傾け，太陽を見上げ，依然のように羊の世話やわずかな家の土地の世話など，あらゆる種類の仕事をしたと。そして時には，例の谷間の小川の傍に出かけて行き羊に必要な小屋を作るのであるが，哀しくも Michael は「石一つだに持ち上げることはなかった」('And never lifted up a single stone.') ことが人々をして Michael 老人に哀れみの情を抱かせ，長く記憶させる。しかし，Michael の悲劇は「石一つだにもち上げることはなかった」ことにあるのではない。何故なら Michael 老人に

とっては，肉体の衰えは，早晩死と共に当然受容さるべきものであったからである。むしろ，老人にとって悲劇なのは，父子二人の間に交わされた「契約」（'covenant'），つまり約束＝「自然の崇敬」（'natural piety'）が，牧人の生活の継承を約束した筈の愛する息子の疾走によって，哀しくも破られたことにある。最後の一節が明確に伝えるものは *Michael* の個々の物語を遙かに凌駕する寂寥たる風景である。そこでは老人は一人，忠実な老犬を足もとに従えて，「羊囲い」の傍らに腰をおろしているのが時々人々によって見かけられたのである。この Michael 老人の姿は囲いの「石」と「川」に見られる自然の風景と一体化した〈自然人〉（natural man）としての老人の姿であり，また『決意と独立』（*Resolution and Independence*）（1802）において「荒野の中の沼の辺りに身動きもせづ佇む」(75)「蛭取り老人」（'The Leech-Gatherer'）の姿である。その後も老人は七年の長きに亘り羊小屋の仕事に従事したがその仕事はついに未完成のまま，死んで行く。

There, by the Sheep-fold, sometimes was he seen
Sitting alone, with that his faithful Dog,
Then old, beside him, lying at his feet.
The length of full seven years from time to time
He at the building of this Sheep-fold wrought,
And left the work *unfinished* when he died. (Italics mine) (476-8)

その後，妻の Izabel は三年ぐらい生きながらえたが，彼女の死後その土地は人手に渡り，勤勉の象徴としての「宵の明星」とあだ名された老夫妻の家はとり払われ，その土地には鍬が入れられ，辺りは一変したことで話は終わっている。しかし，いわゆるこの Michael 一家の最終的な敗北は，最後の一節の「羊囲いの石」'Sheep-fold' と「時」のイメージとしての「騒々しい川」'tumultuous brook' との関係に見られるように，Wordsworth にとっては自然の法則の一部に過ぎない。

Yet *the oak is left*
That grew beside their door; and the remains
Of the unfinished Sheep-fold may be seen
Beside the boisterous brook of green-head Gill. (Italics mine) (488-491)

むしろ，究極的には生の力への信仰が玄関の前に立つ「刈り込みの木」，樫の老木に示され，「私亡き後にも，少数の心素直な人々（'a few natural hearts'）と私の後継者（'my second self'）としての若い詩人達」(36-8) によって語り継がれることを詩人は意図したのであった。

注

＊ *Michael*, a Pastoral Poem からの引用はすべて R. L. Brett and A. R. Jones: *Lyrical Ballads* (Methuen & Co. Ltd, 1963) による。

(1) E. de Selincourt, *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Early Years* 1787-1805 (O. U. P., 1967), pp.285-312.
(2) ———, *Journals of Dorothy Wordsworth* (Macmillan & Co Ltd, 1959), p.64.
(3) E. de Selincourt, *Early Years* p.309.
(4) E. de Selincourt, *Journals*, pp.65-66.
(5) *Ibid.*, p.76.
(6) E. de Selincourt, *Early Years*, p.308.
(7) S. M. Parrish, *The Art of the Lyrical Ballads* (Cambridge, Mass., 1973), p.151.
(8) Graham Greene, *The Power and the Glory* (Penguin Books, 1968), P.7.
Cf. Mr. Tench went out to look for his ether cylinder, into the blazing Mexican sun and the bleaching dust. *A few vultures looked down from the roof with shabby indifference: he wasn't carrion yet.* A faint feeling of rebellion stirred in Mr. Tench's heart, and he wrenched up a piece of the road with splintering finger-nails and tossed it feebly towards them. One rose and flapped across the town: over the tiny plaza, over the bust of an ex-president, ex-general, ex-human being, over the two stalls which sold mineral water, towards the river and the sea. *It wouldn't find anything there: the sharks looked after the carrion on that side.* Mr. Tench went on across the plaza. (Italics mine)
(9) E. de Selincourt, *Early Years*, p.322.
(10) ————, *Ibid.*, pp.313-14.
(11) F. B. Pinion, *A Wordsworth Companion*, (The Macmillan Press Ltd, London) p.110.
(12) 拙論，「"Immortality Ode" を読む」『鹿児島大学教育学部研究紀要』（人文・社会科学編　第45巻 1994.）pp.71-2.